

イスラムの環境概念

大西 輝明

イスラムとは宗教教理ではなく、「善 (good)」の概念に基づいた生活方法、生活形態全般を指して言う。イスラムの人々 (ムスリム) が倫理的に正しいと考える範囲内で「善」を成し遂げ (すなわち善行 (good deed))、害悪 (harm) を排除しようとする生活形態のことをいう。「善」とは神の本意に沿い、神が喜ぶような生き方をすることであり、善行とは神を信じていることを示すために善を行うことである。ムスリムであることの主要な義務は、善を行い害悪をなさないことにある。

旧来のイスラム教理では、現在われわれが言うところの環境、すなわち自然 (nature) に相当する概念はない。クルアーン (コーラン) では人間世界や、(動植物から太陽、星、空などを含めた) 天地の天然界の全てを含めて被造物、創造物 (creation) と表現されているのみであり、人も神の創造物のひとつに過ぎないとの認識である。現在のイスラムにおける「環境」は、以下のふたつのイスラム概念から規定されるものとなっている。

- 1) 唯一性：世界を創造したのは唯一神であり、神は価値観と倫理の源である。神は人の考えや行動を統御する。
- 2) 代理性：人は神の代理人である。ここで、代理人とは世界をリードし、すべての創造物を正しい方向へ導く者のことを言う。土、空気、水、動植物、さらに月、星に至るまで、自然や世界全体は神の創造物であり、人は全ての創造物を正しい状態に導くための代理人として創造された。したがって、人はこうした自然や世界全体に対して責任を負った存在であり、自身の環境を保護することが求められる。イスラムでは、環境保護はひとつの「善行」となる。すなわち、人は環境に対していかなる行動をとるかが神によって試されているのであり、環境は神によって人が試される場所の対象物なのである。

ここで、イスラムでの「試される」とは、いかに現世で「善」をなしたかを意味する事柄であり、「善行」の存否によって現世終了後の、来世へ渡る最後の審判 (judgment) 時に楽園、または業火の地獄へ振り分けられるとするものである (注1)。イスラムでは来世は永遠、かつ本質的であり、来世こそが真の世界であるとする。このため「来世での命 (Hereafter life)」の信念は極めて強く、来世存在の信念がムスリムの現在の行動を規定するものとなる。すなわち、来世の概念や信念なくしては、現在の行動は無意味なものとなるのである。

イスラムの倫理と価値観によれば、人とそれ以外の創造物、すなわち環境とは対等であり、どのような創造物であれ重要でないものは無いとする。それぞれの創造物はそれぞれの役割を持っており、そうした創造物の命や存在を故なくして停止させる権限を人は与えられていないとする。すなわち、環境を豊かに繁茂させることは推奨され、「善行」となるが、環境に害を与える行動については、厳しく禁止されることとなる。預言者ムハンマド

(モハメッド)の言語録ハディースには、以下のような言葉があって象徴的である。

“ If it is the day of judgment, and you have a small tree in your hand, plant it, so you will do a good deed “

上述の「善」とは、イスラムでは公共の利益 (public interest) を意味するとも解釈され、「公共の利益」を守ることはイスラムの歴史を通して多くの意思決定過程の基本となってきたものである。「公共の利益」とは個人的な利害得失を対象とするのではなく、イスラム全体が総体として得る利益をさして言う。したがって、個人や地域コミュニティの利益よりもイスラム全体の利益が優先されて追求され、イスラム全体の害悪は個人や地域コミュニティの害悪に優先して排除されることになる。異なった見解の二つ以上の「公共の利益」が衝突する場合には、より多くの人々に支持される利益が採用されることになる。こうしたことの例として、イスラムではどのような理由であれ人をあやめた場合、(例外はあるが) 一般に殺人者は死刑を宣告される。これは、長い目で見た場合、殺人を犯すほどの危険な人間は、いないほうが公共の利益にかなうとする理由のためである。

こうした原理は環境問題にも適用される。環境は神がわれわれ人間のために作ったものであるので、環境は公共の利益に係る対象物となる。それゆえ、環境は個人の利益に優先する存在となる。したがって、例えば、冷媒としてのフロン利用は個人的な便益に属することであるが、オゾン層問題は公共の利益に関する事柄になるとする理由で、イスラムではフロンの利用を禁止することになる。宇宙は進化するものとして神が創ったものならば、環境をもとの状態のままに人為的に保存しようとするのは神の進化システムに背くことになるのではないか、過度の保護策は平衡を乱す原因となり、悪い方向へ向かわせることになるのではないかなどとする議論がある。イスラムでの保存、保護という概念は、それらが生命の目的、公共の利益という目的にかなった時には意味のあるものとなるものであり、保存や保護のすべてが神意に背くものとなるのでは決してないのである。

こうした考えに基づけば、人と環境とのかかわり方に関するイスラムの精神は、健全な環境の維持と人間の活動との調和をはかることにあると言える。すなわち、イスラムが求める目的のひとつは、自然に対するダメージを最小にしつつ人間の日々の生活を快適なものにするところにあるといえる。こうした事柄の具体的内容は、以下のようなものである。

- 1) 植栽の奨励：さまざまな植物を栽培し、それらを増やすことは善行であり、イスラムのひとつの目的でもある。糧を得るための農業のみならず、一般の植栽の奨励もなされており、このため、ムスリムの多くは植樹や園芸に興味を持ち、家屋周辺を庭園化している例は多い(注2)。
- 2) 環境に悪影響を及ぼす要因の除去：環境悪化をもたらす最大の要因は貧困であるとする。イスラムは貧困とそれから派生する飢餓の撲滅につとめるとし、労働の奨励と怠惰の排除をとおして、自身の手を介して糧を得ることを訴えている。
- 3) 資源の過剰利用の禁止：イスラムでは、不必要で過剰な資源利用は悪魔の行為であるとしている。

4) 生物の無意味な殺生の禁止：動物や鳥類の無意味な殺生、草木の無意味な刈り倒しなどは、地上の秩序を乱す行為であるとする。人々のこうした無責任な行為が、環境破壊の主原因であるとする。

5) 環境汚染の防止：環境の汚染は人間のみならず、全ての創造物に悪影響を及ぼすとする。また、クルアーンでは流行病や伝染病にたいしても注意を喚起し、そのさまざまな予防策を「神」が教えるとする体裁になっている。

さらに、環境をきれいに保つことや、その保護に関するイスラムの日常レベルでの内容は、以下のような事柄である。

1) 個人の身体を清潔にすること：祈りの前の沐浴、シャワー、衣服の清潔、油脂性食物を摂取した場合には身体や手足の洗浄後に就寝することなど。

2) 家屋や家庭内を清潔に保つこと

3) モスクを清潔に保つこと

4) 道路を清潔に保つこと：ごみ、くず、石、汚水などが道路上に落ちていてはならないこと（注3）。汚染物を排出する工場を、道路間近に建設してはならないことなど。

5) 食物の衛生面での配慮：新鮮な食物を摂取すること、イスラムの規定に合った（ハラール）食物の摂取など（注3）。

6) 火の使用には注意すること：火の不用意な使用は煙を発生させ、ひいては酸性雨の原因ともなり得るため。

7) 鳥類への配慮：鳥類は人と同様なコミュニティーを作り、害虫を減らす役割をも果たすことを考慮し、その保護について配慮すること。

8) 水への配慮：クルアーンでは、「神は全ての生物を水から作った」としている。水の汚染防止について配慮すること。

9) その他：風や雨なども神の持ち物であり、これらを汚すことは神の意思に背くことになること。

このように、イスラムの環境問題とは西洋諸国のそれと同様に、自然と人の進歩との調和を図ることが基本的な事柄となるが、後者のそれとは異なって、イスラムではさらに、人の内面世界と外部世界との調和を図ることをも主な目的としている。したがって、イスラムでの環境問題とは、人が自然の一部として存在することの意味を問うことにほかならないのである。しかし、現実にどれほど環境を意識して生活しているかということはこうした観念論的な議論とは別であるらしく、社会教育をも含めた環境教育の必要性を感じさせる例は多い（注4）。

参考文献

Abu-Hola, I.: "An Islamic Perspective on Environmental Literacy" in *Improving Environmental Literacy in Teacher Education*, ed. by Q. Al Shannag and H. Schreier (National Center for Human Resources Development, Amman, Jordan, 2001),

pp.159-172.

Dien, M.I.: *The Environmental Dimensions of Islam* (Lutterworth Press, Cambridge, UK., 2000).

Khalid, F.M.: "Islam and the Environment" in *Encyclopedia of Global Environmental Change Vol.5*, ed. by P.Timmerman (John Wiley & Sons, Chichester, UK, 2004), pp.332-339.

(注1) 楽園や地獄のイメージを与えるものとして、クルアーンには以下のような記述がある: 「よいか、判決の日、それは誰もかれもが(よび出される)定めの時。...誰からも助けて貰うわけには行かぬ。無論、アッラーの特別の思召しを戴く者は別だが。...見よ、このザクームの木(地獄のどん底に生える怪木)これが罪ふかい者の食べ物。どろどろに溶かした銅のように腹の中で煮えかえり、熱湯のようにぐつぐつ煮え立つ。...だが敬虔な信者たちだけは安全なところに置いて戴ける。見はるかす緑の園、湧き出す泉。(宴会の座席では)絹や錦を身につけてみんな互いに向かい合う。それからまた、つづらな瞳の美女たちを妻として与えよう。ここではどんな果物でも望み次第、なんの心配もありはせぬ。ここへ入ったからは、最初一遍死んだだけでももう二度と死の苦しみをなめることなく、地獄の責苦からは(アッラーが)守って下さる。...」(井筒俊彦訳「コーラン(下)」, 岩波文庫、p.110)。

(注2) 写真1~3: 家屋周辺にアーモンドの木を植え、屋上に庭園を作った例など、典型的なアラブの家屋(ワディムサの町)。

(注3) 「ハラール」とは(クルアーン詠唱などの)イスラムの儀式に則って屠殺された動物(の肉など)をさして言うが、それは動物の血を含んではならぬこと、病気の動物であってはならぬこと、豚以外の動物でなければならぬことなどの条件をも満たす必要がある。

(注4) 写真4: 道路に捨てたごみの例(アルフセイン大学構内)。道路を清潔に保つとするのはイスラムの方針である。しかし、人々は自宅や車の窓から、または道路歩行中にもろもろのごみを道路に捨て去る。アルフセイン大学では数百メートルに亘って、こうしたごみが(道路から遠く離れた場所にある)フェンス際にたまる。「ごみを捨てる」ことが「自分自身や家屋内をきれいにする」ことにつながるとしても、それが「道路をよごす」ことにつながるとの意識は薄い。「道路を清潔に保つ」ことは「道路の清掃を行う」ことであって(実際、ヨルダンでは道路清掃を専門とする労働者は多い)それは「道路にごみを捨ててはならぬ」ことと同義ではないらしい。義務教育課程でも、こうした生活指導はあまりなされていない(らしい)。

写真 1



写真 2



写真3



写真4

